

Kazuo Ishiguro と廃棄のイメージ

「やさしいだけの鎮魂歌」ではなく

中川僚子

生地長崎の原爆投下、被爆という体験は、カズオ・イシグロの文学にどう関与しているのだろうか。本発表では、煙、捨てられた車、埃と、廃棄にまつわる3つのイメージに焦点をしばり、廃棄のイメージの複層性に注目しながら、イシグロのテキストを解きほぐすことを試みた。副題は「戦争の記憶をやさしいだけの鎮魂歌に終わらせてはならない」という須賀敦子の言葉を踏まえたものだが、イシグロの小説は、もとより平和を直接的に訴えるようなメッセージ性とは無縁である。「やさしいだけの鎮魂歌」とは遠く離れたところにあるように見えるイシグロの小説について、あえてこうした問いを設定することで見えてくるものは何か。作家の意図が透かし見えるような作風ではなく、むしろ意図の表出を徹底して排除する作風でありながら、その一方で、イシグロは「表面の下に隠れている普遍的なストーリー」「底流にあるヒューマンストーリー」を追究したいとも表明している。被爆者を母にもつイシグロが、おそらくは長崎を舞台とする作品を書く中で追体験した、二次的被爆とも言うべきイシグロの体験と、その文学の関係の一つの可能性を探った。

1. 「二筋の煙」をどう読むか

長編第二作の『浮世の画家』(1986)と、それに先立つ1985年発表の短編「1948年10月」における「煙」のイメージを比べてみる。どちらも長崎を舞台とはしていないものの、主人公の老画家オノ・マサジにとっての戦争の意味を問うという意味で、イシグロと被爆体験の関係を探る上で重要な作品といえる。短編は、4部構成の長編『浮世の画家』の第1部前半シントロウという人物にまつわるエピソードとほぼ同一だが、その結びで、終戦後3年を経た秋の日、オノは、「思案橋」から復興の進まぬ瓦礫の光景を眺め、そこに立ち昇る「二筋の煙」を見つめる。オノは、「二筋の煙」の正体に三通りの可能性を見ている。「役人」の「緩慢な仕事」、「子どもの火遊び」、そして「人が帰った後の野焼きの煙」という解釈である。最終的には、「かつてこのあたりの常連だった誰かれをみな思い出すと、そうとしか思えない」と述べて、野焼きの煙とする解釈を選ぶ。ここには、オノばかりでなく、おそらくは作者自身の戦争犠牲者への鎮魂の祈りが託されていると見てよいだろう。だが注意したいのは、「役人」による「いつ終わるともしれぬ緩慢な仕事」が、公務員が敗戦後に各地で焼却した公文書と考えられることだ。死者を悼む限りにおいて、オノは戦争犠牲者の立場に立ち続けることができる。だが、「二筋の煙」が証拠隠滅の煙である可能性—戦中戦後の公文書焼却の実態については、アーカイヴ研究のさらなる成果を待つ必要があるとはいうものの—をかすかに示唆することによって、テキストには、戦争遂行に加担したオノの罪責感とそこからの逃避を、読者が当事者的に共有することの促しを備えることになる。オノ自身の、おそらくオノ本人にとっては無自覚の、意識の浮遊とその着地点を凝視するようという促しである。

短編の結びの一節に見るこのような主人公の意識の浮遊は、長編小説『浮世の画家』にも引き継がれる。愛弟子クロダを社会的に抹殺した過去の自らの行いを回想しつつ、オノは、クロダの作品を憲兵が庭で焼却処分した臭いについて語るのだが、煙＝罪責感という連想自体は自らに封印し続ける。『浮世の画家』の最終章で、オノが思案橋の上から見るのは「煙」ではなく、「二人の小さな少年」が遊ぶ姿であり、二人の少年は、さらにかつて行きつけの店があった歓楽街に建つガラス張りのオフィスビルから出て来た二人の青年へと、さらに別の青年を加えて、三人が明るい陽光の中談笑する姿へと展開する。「この青年たちの未来に幸あれ」というオノの祈りで『浮世の画家』は結ばれる。2という数字は、オノの軍国主義発揚の代表作への目配せでもある。「煙」のイメージをはさんで、被害者と加害者、過去と未来、平和と戦争が反転している。煙は、複数の意味を「同時に」帯び、一つの意味に集約されることを拒む。イシグロは、物事の両義的あるいは多義的事態を見据え、共存しがたいもの、相反するもの、すべてを凝視し続ける。

2. 「ゴミ」、「埃」、美しく懐かしいもの

イシグロ作品において、廃棄物の出現は、ある時は展開の意外さによって読者の不安を誘い、ある時は笑いを引き出す。『充たされざる者』には、主人公のピアニスト、ライダーが、ヨーロッパのある都市の駐車場で廃車を見出す場面を例にとろう。ペンキが剥げ落ち、錆に覆われた車を愛撫するこの場面は、ロラン・バルトの名高い写真論『明るい部屋』で使われている「ステューディウム」（一般的関心を持つ人が期待する

典型的な情報)、「プンクトゥム」(ステューディウムの場をかき乱しにやってくる予想しない刺し傷、小さな裂け目)という言葉を使って説明することができるかもしれない。ときには不幸や憎悪の記憶もこびりついたままでありながら、イシグロの作品において廃棄物はプンクトゥムとして出現し、ありふれたモノが、取り替えのきかない、固有の対象に転じる契機となる。

イシグロの作品には光の帯に浮かぶ埃の描写が繰り返し登場する。『私を離さないで』では、書名ともなった「私を離さないで」という曲が収録されたミュージック・カセットテープが登場する二つの場面に前触れのように登場する。『浮世の画家』においても、オノの自慢の屋敷の渡り廊下の屋根には、今や、戦時中に爆撃によって大きな穴が空いてしまったが、雨漏りを防ぐために屋根に置かれた防水布の隙間からは、朝の光が差し込むたびに、その中に埃は浮かぶ。オノはしばしば、光の帯に浮遊する埃が、屋根が落ちた瞬間の軌跡をこの光の帯が描き出すのを見つめるのだと語る。オノが屋敷を直さないのは、この光景をいつまでも繰り返し見たいからではないかとすら思える印象的な描写だ。自己憐憫にまみれ、自己正当化に拘泥するオノではあるが、おそらく、この情景を見つめる一瞬だけは、読者もオノの胸に宿る愛惜の感情に、読者も一体化することができる。埃は、登場人物が失われたものに抱く愛惜に読者を巻き込む媒体となるのだ。

3. イシグロにおける廃物の行方

煙、廃車、光の帯に浮かぶ埃、これらはいずれも役割を終えた過去の遺物、あるいは役割をもたない無用のモノでありながら、「今」を穿つように現存する。モノとしての決まった価値は持たず、安定した機能を欠くが、その漂流する意味ゆえに、読者の内面の感情に運動性を導入する。

廃棄・廃物のイメージがもっとも効果的に使われたのはおそらく『わたしを離さないで』であるが、その後の2作品にも廃物は登場し、イシグロの作家的志向を表している。

短篇集『夜想曲集』(2009年)収録の「降っても晴れても」では、友人夫婦の関係破綻の危機に奔走する主人公レイは、留守番の間の不始末を隠蔽しようと、近所の大型犬が侵入して室内を荒らしたと見せる工作する。フロアスタンドと花瓶を倒し、砂糖壺の中身を床にこぼし、いわば生活空間を廃墟化しようとするのだ。人工的に作り出した廃墟に信憑性を与えるために、レイは各種スパイスを混ぜ合わせ、仕上げに履き古した革靴を鍋に投入して煮込み、犬の糞の臭いを人工的に作り出す。廃棄・廃物のイメージを、新たにコメディに投げ入れて攪拌しようとするこの作品では、主人公の姿に、作家イシグロの自嘲的な自画像が重なる。作家的自意識が出現し、廃物を表象することがより困難になっているように思える。

一方、2015年出版の『忘れられた巨人』では、埃は、月の光に浮かぶ塵として登場する。主人公の老夫婦が、大昔に掘られた暗いトンネルを進んで辿り着いた二間の地下空間で、天井隙間から、眩しい月の光が差し込み、隣の間を照らす。迫りくる獣物から身を守るため、騎士ガウエインが、二つの間を隔てる鉄の落とし格子のロープを断ち切ったとき、大きな振動とともに、月光の中にもうもうと塵が舞い上がる。床を覆う瓦礫と言えたものは人骨だ。月光に浮かぶ塵は、どの死者の成れの果てか。

現役の進行中の作家としてさらに変貌を遂げるはずのイシグロのこれからの変化の中で、廃物のモチーフがこの先どのように変奏を加えるのか期待しつつ見守りたい。

主要参考文献

Ishiguro, Kazuo. "Strange and Sometimes Sadness." *Introduction* 7, Faber and Faber, 1981, 13-27; "Bomb Culture." *The Guardian*, August 8, 1983; "October 1948." *Granta* 17, 1985, 178-85; *An Artist of the Floating World*. Faber and Faber, 1986; *The Unconsoled*. Faber and Faber, 1995; "Between Two Worlds." Interview with Suzie Mackenzie. *The Guardian*, March 25, 2000; *Never Let Me Go*. Faber and Faber, 2005; *Nocturnes*. Faber and Faber, 2009; *The Buried Giant*. Faber and Faber, 2015; Morikawa, Shinya. "Kazuo Ishiguro and His View of Life: Idealism, Nostalgia, Fatalism." Ph.D dissertation, U of Tokyo, 2015. 麻生えりか「Kazuo Ishiguro のコズモポリタニズム--A Pale View of Hills と *Never Let Me Go* における被爆の風景」『青山学院大学文学部紀要』第52巻、2011年、57-76頁。加藤聖文「敗戦時における公文書焼却の再検討」『国文学研究資料紀要アーカイブズ研究篇』第15号、2019年3月、1-15頁。 荘中孝之『カズオ・イシグロ <日本>と<イギリス>の間から』春風社、2011年。 荘中孝之・三村尚央・森川慎也編『カズオ・イシグロの視線 記憶・想像・郷愁』作品社、2018年。『水声通信 カズオ・イシグロ』第26号、2008年。 須賀敦子『塩一トンの読書』講談社文庫、2014年。 田尻芳樹・三村尚央編『カズオ・イシグロ「わたしを離さないで」を読む』、水声社、2018年。 ロラン・バルト、花輪光訳『明るい部屋』みすず書房、1985年。 平井杏子『カズオ・イシグロ 境界のない世界』水声社、2017年。 平井杏子『カズオ・イシグロの長崎』長崎文献社、2018年。